



『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿：第六帖(一) 春草～冬草

著者	福田 智子, 土山 玄, 藤井 翔太, 久保 文乃
雑誌名	文化情報学
巻	4
号	1
ページ	1-12
発行年	2009-03-20
権利	同志社大学文化情報学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012257

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿——第六帖（一）春草／冬草——

福田智子、土山 玄
藤井翔太、久保文乃

『古今和歌六帖』は、約四千五百首の歌を、二十五項目、五百十七題に分類した類題和歌集である。収載歌には、『万葉集』『古今集』『後撰集』など、出典の明らかな歌もある一方、現在では出典未詳と言わざるを得ない歌もある。本稿では、第六帖冒頭の春草から冬草までの四つの題に配されている出典未詳歌、五首について注釈を施す。

凡例

- 一、本稿は、『古今和歌六帖』所載の和歌について、出典考証をもとに、出典未詳と考えられる歌について注釈を加えるものである。なお、出典未詳歌の認定については、「〔附録〕『古今和歌六帖』別出歌一覧」を参照されたい。
 - 二、歌番号は、『新編国歌大観』の通し番号を用い、歌題を（ ）を付して記す。
 - 三、底本は、『新編国歌大観』と同じく、宮内庁書陵部蔵桂宮本とし、書陵部の紙焼き資料に拠る。
 - 四、本文は、歴史的仮名遣いに統一し、踊り字を解消して当該の文字に改め、底本の表記を（ ）に入れて傍記する。また、私見によって濁点を付す。さらに、送り仮名など、底本にない文字を補った場合には、本文の右に「・」を付す。なお、漢字仮名の区別は底本のままとする。
 - 五、校異は、語の異なりのほか、表記の違いも示す。諸本とその略称は次のとおりである。
- 永青文庫蔵北岡文庫本 略称（永）
 - 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本 略称（松）
 - 内閣文庫蔵「和学講談所」印本 略称（和）
 - 内閣文庫蔵「江雲涓樹」印本 略称（江）

○神宮文庫蔵「林崎文庫」印本 略称(林)

○神宮文庫蔵「宮崎文庫」印本 略称(宮)

○和歌山大学附属図書館紀州藩文庫蔵田林義信氏旧蔵本 略称(紀)

○ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本 略称(黒)

○寛文九年版本 略称(寛)

なお、諸本文は、主として国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルム・紙焼き資料に拠ったが、次の三本については個々の資料に拠った。

(永) 細川家永青文庫叢刊3『古今和詞六帖(下)』(汲古書院、昭和五十八年一月) 所収の影印

(松) 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫所蔵の原本および紙焼き資料(寛) 架蔵本

六、他出には、『古今和歌六帖』からの引用と思われる歌について、歌集の名称(『新編国歌大観』の目次に拠る)、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、作者名、歌本文、左注を、順に示す。

七、考察 考察中での和歌の引用形式は、原則として、「和歌本文」(歌集名・部立・歌番号・作者名・詞書)とする。なお、『万葉集』の番号は、新・旧の順で表記する。

注釈

三五四九(春草)

【本文】

はるくればのべのまにまに(くをい)おひしげるちぐさに物をおもふ比かな

【校異】 ○はる―春(永・松・和・江・林・宮・紀・黒・寛) ○のへ―

野へ(松・和・江・宮・黒・寛) 野邊(紀) ○をいしける―生茂る(松・江・

紀・黒) 生しける(和・林・宮) おひしげる(寛) ○ちぐさ―千種(松・

江・紀・寛) ○物―もの(永・松・和・江・宮) ○おもふ―思ふ(松・

江・紀・黒・寛) ○比かな―ころかな(永・和) ころ哉(宮) 比哉(寛)

【語釈】 ○のべ 野のほとり。野原。 ○まにまに 事柄の成り行きに従うさまを表す語 ○ちぐさ いろいろの草、多くの草という意味の

「千草」に、種類の多いという意味の「千種」を掛ける(「考察」参照)。

○物をおもふ 物事を思い悩む。思いにふける。

【通釈】

春が来ると、野原の広がりそのままに生い茂るいろいろな種類の草花のように、さまざま物思いをするこの頃だなあ。

【他出】なし

【考察】

第二句「のべのまにまに」という歌句の用例は、「行く春の跡だにありと見ましかば野べのまにまにとめましもを」(寛平御時后宮歌合・春・三六)が初出と見られ、他に「たましひや草むらごとにかよふらんのべのまにまに鳴くこゑぞする」(宇津保物語・さがるん・一九〇・兵部卿宮)もあるが、当該歌を含めて『新編国歌大観』に三首見出せるのみである。

下句の「ちぐさに物をおもふ比かな」には同じ句を有する歌として、「秋ののみにみだれてさける花の色のちぐさに物を思ふころかな」(古今集・恋二・五八三・つらゆき・題しらず)、「秋の野のをばなにまじり咲く花の千草に物をおもふころかな」(袖中抄・ほの花・五四七・よみ人しらず)を挙げることができる。前者は、『古今六帖』(第二・一一四三・秋のの)

にも採られている。当該歌が春の野を詠んでいるのに対し、いずれも秋の野の歌である。

「ちぐさ」という語は、勅撰集では、先の貫之歌をはじめとして『古今集』から見える。『古今集』中、春部の歌は、「さく花は千くさながらにあだなれどたれかはるをうらみはてたる」（古今集・春下・一〇一・藤原興風・寛平御時きさいの宮のうたあはせのうた）、「春霞色のちくさに見えつるはたなびく山の花のかげかも」（古今集・春下・一〇二）の二首存する。いずれも藤原興風の寛平御時后宮歌合歌である。一方、秋の部立の歌は、「あきのつゆいろいろごとにおけばこそ山のこのはちくさなるらめ」（古今集・秋下・二五九・よみ人知らず・題しらず）、「吹く風の色のちくさに見えつるは秋のこのはちればなりけり」（古今集・秋下・二九〇・よみ人知らず・題しらず）の二首ある。前掲の貫之歌も、恋部に配されているが、秋の野を詠んだものであった。

八代集において、「ちぐさ」の歌が春部に配されているのは、この『古今集』のみである。これに対し、秋部には、『古今集』の他、『後撰集』以降にも用例が見出される。つまり、「ちぐさ」という語の勅撰集における入集箇所を見るかぎり、春草について詠まれる当該歌は、『古今集』との共通性が窺える。さらに、この『古今集』の春部の歌二例に、前述の「のべのまにまに」の初出例をも考えあわせると、寛平御時后宮歌合歌との表現の類似性が高いとも言えよう。

三五五六（夏草）

【本文】

人しれぬわれよりほかに夏草のしげりあふこそみればねたけれ

【校異】○人しれぬ―人しれず（黒・寛） ○われ―我（松・江・林・黒・寛）
吾（和・紀） ○ほか―外（松・和・江・林・紀・黒・寛） ○しげりあふ―茂りあふ（松・和・江・林・宮） 茂り合（紀） ○みれば―見れば（江・黒）

【語釈】○人しれぬ 「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。恋い慕う人に知られないの意。 ○われよりほかに 私以外の人（女）に。 ○夏草の「しげり」にかかる枕詞。 ○しげりあふ 草や葉がたがいにして、しげって重なりあう、一様にしげる、の意。「繁り逢ふ」（絶え間なく逢う）を掛ける。 ○みれば 動詞「見る」の已然形に接続助詞「ば」が付いたもの。ここではとくに、…するといつも、という恒常条件を表す。 ○ねたけれ 「ねたし」の已然形。係助詞「こそ」の結び。しゃくだ。いまいましい。腹立たしい。

【通釈】

あなたにふりむいてもらえない私とは別の女のもとに、あなたが足しげく通って逢うのが、見るたびにねたましい。

【他出】なし

【考察】

初句に見える「人しれぬ」という歌句は、勅撰集においては「人しれぬ思ひのみこそわびしけれわが歎をば我のみぞしる」（古今集・恋二・六〇六・つらゆき・題しらず）、「ひとしれぬわが物思ひの涙をば袖につけてぞ見すべかりける」（後撰集・恋三・七六二・よみ人知らず・人の心つらくなりにければ、袖といふ人をつかひにて）などが見出せる。当該歌のように「われ」を修飾する他例は管見に入らないが、類例として、「人

しれぬ身はいそげども年をへてなどこえがたき相坂の関(後撰集・恋三・七三一・これまさの朝臣・女のもとにつかはしける)がある。

一方、初句には「人しれず」の異文がある。この句は、勅撰集において、「人しれずおもへばくるし紅のすゑつむ花のいろにいでなむ(古今集・恋一・四九六・読人しらず)、「ひとしれずわがしめしののとなつは花さきぬべき時ぞきにける」(後撰集・夏・一九八・よみ人しらず・題しらず)などが見出せる。当該歌の場合、「人しれず」は「(しげり)あふ」を修飾することになる。

つまり、「人しれぬ」では「人に知られない私」の意となり、「人しれず」では「ひそかにたびたび逢う」と解釈できる。それぞれに意が通じることが、異文発生の一因とも見られよう。

第二句に見える「われよりほかに」という歌句は、「こひしきもころよりあることなればわれよりほかにつらき人なし」(新撰和歌・三五〇)が、ごく初期の例である。また、「きみこふるなみだもそでにもりぬればわれよりほかに人やるらむ」(中務集・一六二・また、ひと)という歌もある。「……よりほかに」という表現は、下に打消や反語を伴うことが多いが、当該歌のように、そうでない場合もある。「我ならぬ草葉ものは思ひけり袖より外におけるしらつゆ」(後撰集・雑四・一二八・ふぢはらのただくに・左大臣の家にて、かれこれ題をさぐりて歌よみけるに、つゆといふもじをえ侍りて)という歌も、その例として挙げられよう。

第三句の「夏草」という語は、『万葉集』に十二例収められている(うち六例は長歌)。勅撰集においては『古今集』に二例、『拾遺集』に一例というように少数であるが、『新古今集』には五例ある。

三句と四句に見える「夏草」と「しげる」との組み合わせは、勅撰集の初出として、「夏草のうへはしげれるぬま水のゆくかたのなきわが心かな」(古今集・物名・四六二・ただみね・かたの)を挙げることができる。この歌は、『古今六帖』において、当該歌の次に収められている。他にも、「なつくさはしげくひごとになりゆけどかれにし人のみえぬわがやど」(躬恒集・二三三・なつ)などがある。

四句の「しげりあふ」は、「神がきのみむろの山のさかきばは神のみまへにしげりあひにけり」(古今集・大歌所御歌・一〇七四)の他、『拾遺集』には、「おほあらしのもりのした草しげりあひて深くも夏のなりにけるかな」(拾遺集・夏・一三六・ただみね・右大将定国四十賀に、内より屏風てうじてたまひけるに)など、四例が収められている。当該歌のように「しげりあふ」を掛詞として詠んでいる歌はきわめて少なく、管見では、「きみがよになにはのうらはしげりあひぬあしかることをせねばなるべし」(忠見集・一四六・つかみなるひと)を、今のところ見出すのみである。

三五六〇(夏草)

【本文】

なつくさのかりのよひとはわびしくも我に秋風吹き初めつるか

【校異】 ○なつくさー夏くさ(永) 夏草(松・和・江・林・宮・黒・寛)

○わひしくもー侘しくて(松・江・紀) 侘しくも(和・林・寛) ○我

ーわれ(永・和・林・宮・紀) ○秋風ーあきかせ(永) 秋かせ(松・江)

秋風(宮・紀・寛) あき風(黒) ○吹初ーふきそめ(永・宮)

【語釈】 ○なつくさの 夏草は「刈る」ものであるところから、「かり(仮)」

にかかる枕詞。○かり 一時的。間に合わせ。かりそめ。○よひ 夜に入って間もない頃。○わびしくも「わびし」は、もの悲しい、つらいの意。○我 私。男性の訪れを待つ女性と見た。〔考察〕参照。

○秋風「秋」に「飽き」を掛ける。

【通釈】

夏に生い茂る草が刈りとられるように、あなたがかりそめに一晚逢っただけの人とは思わなかった。悲しいことに、私に秋風が吹き始め、あなたから飽きられてしまったのか。

【他出】なし

【考察】

「なつくさのかり……」と続く用例は、早くも『万葉集』に、「このころのこひのしげけくなつくさのかりはらへどもおひしくごとし」(万葉集・巻十・一九八八・一九八四・草に寄す)、「わがせこにあがこふらくはなつくさのかりそくれどもおひしくがごと」(万葉集・巻十一・二七七九・二七六九)という歌が見える。だが、勅撰集においては、「夏草のかりそめにとてこしやども難波のうらに秋ぞくれぬる」(新古今集・秋下・五四七・能因法師・津のくにに侍りけるころ、道済が許につかはしける)と「しげさのみ日ごとにまさる夏草のかりそめにだに問ふ人もなし」(新統古今集・夏・凡河内躬恒・夏歌の中に)の二首が存するに過ぎない。また、一条朝あたりまでの私家集を検しても、『万葉集』一九八八(一九八四)番が『人丸集』六七番と『赤人集』二五四番に、また、前掲『新統古今集』の躬恒歌が書陵部本『躬恒集』八六番に載る。他は、「なつくさのかりにたつなもをしければただそのこまをいまはのがふぞ」(和泉式部集・二〇六・あぢきなきことのみいでくれれば、人の

かへりごとをたえてせぬは、いかなればかくおぼつかなきぞ、といひたるに)を見出すのみである。ただし、「なつくさ」と「かり」とが同時に詠み込まれる例としては、「なつくさのしげりのみますわがやどをわけては人のかりにこそこめ」(清正集・二〇・昔ししりたりけるをんなのものへゆくみちに、いみじうあれたるところにたかをはなちてありければ、をんな)、「かりにてもおもへばこそはなつ草のしげれる中をわけつつもくれ」(好忠集・一四〇・五月中)が挙げられる。

「わびしくも」の用例は、まず、当該歌と同じく『古今六帖』の出典未詳歌に、「わびしくもおとのさやけく吹く風の日ごとに秋やもしはきぬらん」(第一・四一〇)がある。『新編国歌大観』によれば、他には、「なにはにも君はすまぬをわびしくもあしのやへぶきひまのなからむ」(範永集・八〇)、「わびしくもくれゆくひかもよしのかはきよきはらをみれどあかなくに」(五代集歌枕・一一八二)の二首のみであり、きわめて少ない。なお、「つれもなくあるらむひとをかたもひにわれはおもへばわびしくもあるか」(万葉集・巻四・七二〇・七二七)という歌もあるが、『校本萬葉集』によると、結句「惑毛安流香」を、諸本「マトヒモアルカ」とし、廣瀬本のみ「マトヒ」の右に「ワビシク クルシク」の傍書がある。「なつくさ」と「秋風」を同時に詠み込んだ歌は、『新編国歌大観』によれば、当該歌の他はすべて後世の例であり、用例数も六首(重出歌を除く)と、きわめて少ない。「うつりゆく日かずしられて夏草の露わけ衣あき風ぞふく」(続拾遺集・羈旅・六七二・前大納言為家・羈中秋といふ事を)、「夏草のふかくは人のちぎれどもしらす心のすゑの秋かぜ」(拾遺風体集・恋・三三六・平時治・寄草恋)というように、夏に契りを交わした男女の仲も、秋には終わるといふ内容がほとんどである。当

該歌は、これら後世の歌のさきがけとして位置づけられよう。なお、先の為家歌が「露わけ衣」を着た男性の立場からの詠であるのが明確であるのに対し、当該歌は、男性の訪れを待つ女性の立場で詠んだ歌であるう。

下句の「秋風」と「吹き初む」との組み合わせは、八代集においては『後撰集』に見える「秋風のうちふきそむるゆふぐれはそらに心ぞわびしかりける」（後撰集・秋上・二二二・よみ人しらず・題しらず）、「松虫のはつこゑさそふ秋風はおと山よりふきそめにけり」（後撰集・秋上・二五一・よみ人しらず・題しらず）の二首のみである。また、ごく初期の用例として、「あきかぜのふきそめしよりをみなへしいろふかくのみみゆるのべかな」（亭子院女郎花合・一〇）が挙げられる。その後には、「ふきそめてまだほどもへぬ秋風のみにしむばかりあはれなるかな」（道命阿闍梨集・一三二・七月十日、かぜのふくに）、「ふきそめし日より身にしむ秋風も萩の葉ならぬ人はしらじな」（定頼集・一一八・返し）など、用例は少ない。なお、『古今六帖』の出典未詳歌に、「春風の吹きそめしよりたきつせのこほりもとけて花ぞちりける」（古今六帖・第一・三七九・はるのかぜ）という「春風」と「吹き初む」を読み込んだ歌がある。

結句の「……つるか」という表現は、八代集ではやはり『後撰集』に、「心有りてなきもしつるかひぐらしのいづれもものあきてうければ」（後撰集・秋上・二五六・つらゆき・題しらず）という歌が存するのみである。同じ貫之の歌としては、家集に、「ねぬるよの夢はなみにもあらなくに立ちかへりつつつ君をみつるか」（貫之集・六四二）という歌が見え、『古今六帖』もこの歌を収めている（第四・二〇五〇・ゆめ）。そ

の他、「まてはむことねたさにのぶればうくもすずろになげきしつるか」（秋萩集・三四）、「わがせこがまませりつるか見ぬほどにはのこぐさもかたまよひせり」（好忠集・一四四・五月中）といった歌が、平安期の例としてかろうじて挙げられ、それ以後も用例は稀少である。

三五六七（秋草）

【本文】

おもふどちあるだに秋はわびしきをくさのかれがれなるぞかなしき

【校異】 ○おもふとち―思ふとち（林・紀・黒・寛） ○あるだに―有たに（和・紀） ○秋―あき（永） 焔（松・和・紀・寛） ○わひしき―侘しき（松・和・江・宮・寛） ○くさ―草（松・和・江・林・宮・紀・黒・寛） ○なるぞ―成ぞ（松・和・江・林・紀・寛） なかぞ（宮） ○かなしき―悲しき（松・紀・黒）

【語釈】 ○おもふどち 思いや感情を共有することができる、あるいは共有している親しい人。 ○だに 副助詞。程度の甚だしい事を挙げて軽重どちらの方向にも他を類推させる。 ○わびし つらく悲しい。心さびしい。 ○かれがれ 草木が枯れようとしているさまの「枯枯」に

人との関係が薄れゆくさまの「離離」を掛ける。『日本国語大辞典』では当該歌を用例としている。

【通釈】

互いに気の通じ合う人と一緒にいてさえ、そもそも秋は心さびしいのに、そのうえ草が枯れゆくように、離れ離れになってしまうのは悲しいことだ。

【他出】 なし

【考察】

初句の「おもふどち」という語を有する歌は、『万葉集』に十首（うち長歌四首）ある。これに対して、八代集全休では六首に過ぎない。八代集においては、「おもふどち春の山辺にうちむれてそこともいはぬたびねしてしか」（古今集・春歌下・一二六・素性法師・春の歌とてよめる）など、『古今集』に三首と最も多く詠まれており、『拾遺集』に二首、『新古今集』に一首ある。一方、私家集には、「はるののにこころのべんとおもふどちこしけふのひはくれずもあらなん」（赤人集・一七五）の他、「おもふどちまとゐてをればむめのはなこころにくくやふかくみゆらむ」（中務集・二二二・また、これがならむ）といった歌がある。

「おもふどち」という語を有する平安期の歌は、季節が春であることが多く、「梅」や「桜」、「鶯」といった語とともに詠まれる傾向がある。気の合う仲間と花見に出掛ける光景は、「世の中にうれしき物は思ふどち花見てすぐす心なりけり」（拾遺集・雑春・一〇四七・かねもり・円融院御時三尺御屏風に、花の木のもとに人人あつまりるたる所）というように、屏風の図柄としても定着している。とすれば、秋になって「かれがれ」になってしまった「おもふどち」の状況は、これらの春歌と対照をなすものと見られよう。

秋という季節は、服喪のため里下がりしていた近江更衣に贈った醍醐帝の歌、「おほかたも秋はわびしき時なれどつゆけかるらん袖をしぞ思ふ」（後撰集・秋中・二七八・延喜御製・御返し）や、「かなしさの心すごさずとりすゑてあきぞわびしきものといふなる」（宰相中将君達春秋合・七六・春）からも知られるように、「わびし」と形容される。また、「物ごとくに秋ぞかなしきもみちつうつろひゆくをかぎりと思へば」（古

今集・秋上・一八七・よみ人しらず・題しらず）という歌をはじめとして、あらゆる草木につけて秋の悲しさを詠んだ歌も数多い。当該歌は、ただでさえわびしい秋という季節に、秋草が移ろい、枯れていく悲しさと、親しい者が離れ離れになる悲しさを重ねた歌である。なお、「思ふどちところもかへずすみへなたちはなれなばこひしかるべし」（拾遺集・物名・四一六・輔相・とち　ところ　ちばな）という歌は、物名歌ではあるが、親しい者との離別に際しての心情を端的に表しており、当該歌の内容とも共通する。

「枯る」と「離る」との掛詞は、「山里は冬ぞさびしさまさりける人も草もかれぬと思へば」（古今集・冬・三一五・源宗于朝臣・冬の歌とてよめる）が人口に膾炙しているが、暁語として用いられる例は、「山がつかきほわたりをいかにぞとしもかれがれにとふ人もなし」（拾遺集・雑秋・一一四三・権中納言義懐入道してのち、むすめの齋院にやしなひたまひけるがもとより、ひんがしの院に侍りけるあねのもとに、十月ばかりにつかはしける）がごく早い例であり、義懐が出家した寛和二（九八六）年六月二十四日（『日本紀略』）以後の作と考えられる。次いで、「さなくともさびしきものを冬くればよもぎのかきもかれがれにして」（和泉式部集・三八九）、「かきくもる中空にのみ降る雪はひとめも草もかれがれにして」（和泉式部集・七一三・雪のふるひいか、など人のいひたれば）という『和泉式部集』歌が二首見出される。

三五七二（冬草）

【本文】

わすられぬ心のうちは冬くさのかれにし人をこふる成りけり

【校異】○わすられぬ―忘れぬ(松・和・江・林・紀・黒・寛)○心―こ、ろ(永・宮)○うち―内(松・江)○冬くさ―冬草(松・和・江・林・宮・紀・黒・寛)○かれにし―枯にし(松・江・紀・黒・寛)○こふる―恋る(和・宮)○成けり―なりけり(永・松・和・江・林・宮・黒・寛)也けり(紀)

【語釈】○わすられぬ 忘れられない。「れ」は助動詞「る」の未然形で可能の意を表す。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。○心のうち 心の中。心中。○冬くさの 枕詞。冬草は枯れることから、「枯る」と同音の「離(か)る」に掛かる。

【通釈】

あなたを忘れられない心の中は、冬草が枯れはてるように、離れ離れになってしまったあなたを恋しく思ってしまうのだった。

【他出】なし

【考察】

「わすられぬ」という歌句は、「わすられぬころも君にとどめてむいまはかぎりにおもひなるとも」(元真集・二二五)、「わすられぬはるはるごとにもめのはなねをとどめてし人をしのべよ」(一条撰政御集・一八〇・かへし、おとど)、「はらふれどき身のつみはみなつきてわする人のわすられぬかな」(順集・九〇)、「ひとはいさわれはむかしのわすられぬころならびのいけまでぞとふ」(能宣集・二〇七・ものいひ侍る人の、としごろへだてありどころもしりはべらぬが、ならびのいけのほとりなる寺にまかりあひて)などが、十世紀の用例として列挙できる。ただし、「わすられぬ心のうち(は)」の用例は、当該歌のほか「わすられぬ心のうちはうつつにてちぎりし事は夢になりつつ」(小夜衣・

五三・女君(中宮)の一首のみである。

第二句「心のうちは」の例は、早く『万葉集』に、「さくはなはすぐるときあれどあがこふるころのうちはやむときもなし」(万葉集・巻第十一・二七九五・二七八五)という歌がある。ついで、「まれにあふ心のうちは織女のけふより後の袖ぞ露けき」(円融院御集・二〇・左兵衛督濟時朝臣)、「おほかたにくれゆくかたををしみおきてころのうちはあきをしぞおもふ」(好忠集・五〇四)という歌もある。

第三句から第四句にかけての「冬くさのかれにし人」という表現は、「わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず」(古今集・冬・三三八・みつね・物へまかりける人をまちてしはすのつごもりによめる)が初出である。この歌は、『古今六帖』において、当該歌の二首前(三五六九)に収められている。ほかに、「冬草のかれにし人のいまさらにゆきふみわけて見えんものは」(好忠集・三二〇・十一月中)という歌もある。なお、「かれにし人」の例ならば、「なつくさはしげくひごとになりゆけどかれにし人のみえぬわがやど」(躬恒集・三三二・なつ)、「秋ののうつろふみればつれもなくかれにし人は草葉とぞみる」(貫之集・六〇六・恋)、「ゆくゆくともみづる山を見るときはかれにし人もこひしかりけり」(順集・一一三二)、「秋かぜにかれにしひとぞこひらるるやどもころもかれやしつらん」(賀茂保憲女集・一〇三)などがある。結句「こふるなりけり」の用例は、「けさの床露おきながらかなしきはあかぬ夢ちをこふるなりけり」(古今六帖・第二・二三八七・つらゆき)、「おほぞらにしめゆふよりもはかなきはつれなき人をこふるなりけり」(続古今集・恋・二・一〇六一・兵部卿元良親王・だいしらず)以外、管見に入らない。いずれも十世紀の用例である。

附記

本稿は、歌語研究会（同志社大学文化情報学部学生研究会）の活動の成果であり、科学研究費補助金基盤研究（C）「文字列データ解析システムの構築と平安中期歌語生成に関する研究」（課題番号19500217、平成十九～二十一年度）における研究の一部である。土山（三五四九・三五六七番）・藤井（三五五六・三五七一番）・久保（二五六〇番）が分担執筆し、さらに福田が全体にわたる加筆修正をおこなった。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2とともに、竹田正幸氏（九州大学大学院システム情報科学研究院）作成の文字列解析器「eCSA」Ver.2.00を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・鳥原図書館肥前嶋原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げます。

〈附録〉『古今和歌六帖』別出歌一覧——第六帖（丁）春草～冬草——

凡例

- 1 『古今和歌六帖』本文と歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。作者名・詞書・左注がある場合は、当該歌のあとに（ ）を付して記す。
- 2 調査対象として、『新編国歌大観』から以下の歌集を選択する。『古今和歌六帖』の成立を十世紀後半と想定されるが、出典としては、やや後世の作品まで調査範囲を設定している。

第一卷 1 古今和歌集～4 後拾遺和歌集

第二卷 1 万葉集～6 和漢朗詠集

第三卷 1 人丸集～81 赤染衛門集

第五卷 1 民部卿家歌合～61 源大納言家歌合 長久二年、253 紀師匠

曲水宴和歌～269 九品和歌、281 歌経標式（真本）～285 新撰髓

脳、290 新撰和歌髓脳、347 古事記～353 風土記、371 日本霊異

記、372 三宝絵、389 土左日記～393 和泉式部日記、414 竹取物語

～420 落窪物語

第六卷 2 秋萩集～5 麗花集

第七卷 1 奈良帝御集～36 肥後集

- 3 別出歌は、『新編国歌大観』の巻数→通し番号を付した歌集名と歌番号で示す。

〈例〉 3→19 貫之 355

『新編国歌大観』第三卷、19番目の歌集『貫之集』の355番歌

- 4 別出本文に異なる場合は、句ごとに「」を付して記す。なお、漢字と仮名など、表記上の相違は指摘せず、有意の異同のみに限る。

5 『古今和歌六帖』所収歌には、別の歌集の歌との間で、さまざまな類似性を有するものがある。そのまま別出歌とは認めにくいもの、まったく無関係に作られたとも考えにくい場合には、〈参考〉として掲出する。

6 特定の別出歌が指摘できない場合や、十一世紀以降の作品にしか別出が見出せない場合は、いわゆる出典未詳歌として〈未詳〉と記し、傍線を付す。

別出歌一覧

春草

3544 はるくさのしげき我がこひおほうみのかた行くなみのちへにつもりぬ

2-1万葉1924 「へにゆくなみの」

3545 野べみればわかになつみけりむべしこそかきねのくさも春めきにけり

(つらゆき)

3-19貫之355 「春めきにけれ」、1-3拾遺抄7「春めきにけれ」、

1-3拾遺集19 「はるめきにけれ」

3546 いまははやかれはてなまし草のねのもえてもつひに春にあへるかも

(みつね)

7-5躬恒18 「たえずもつひに春にあふかな」、3-12躬恒364「か

はらでつひにはるをまつかな」

3547 かすがのの雪まをわけておひでくるくさのはつかにみえし君かも

7-6忠岑4、3-13忠岑13 「みえしきみはや」、1-1古今478

3548 「見えしきみはも」

うらわかみねよげにみゆるわかきさの人のむすばんことをしぞ思ふ
(なりひら)

5-415伊勢語90 「若草を」

3549 はるくればのべのまにまにおひしげるちくさに物をおもふ比かな

〈未詳〉

3550 やかすともくさはもえなんかすが野をただはるのひにまかせたらな

む(ただみ)

3-23忠見2、3-35重之176、2-5金玉11、2-6和漢朗442、

5-52前十五25、5-266三十人110、5-268深窓秘11、3-13忠岑

167 「かすがのは」、5-267三十六130 「かすがのは」、6-5麗花集

10 「かすがのの」

夏

3551 人ごととはなつのくさのしげくともいもと我としたづさはりなは

3-1人丸65 「夏の草と」、3-2赤人253 「なつのくさに」、

1-3拾遺集827 「君と我とし」、2-1万葉1987 「たづさはりねば」

3552 このごろのこひのしげくて夏くさのかりぞくれどもおひしくがごと

3-1人丸67 「恋のしげけん」「かりはつれども」、2-1万葉1988

「こひのしげく」「かりはらへどもおひしくごとし」、3-2赤

人254 「こひのしげらく」「かりはらへどもおひしけるごと」

3553 あしひきの山下しげき夏草のふかくも君をおもふ比かな(つらゆき)

3-19貫之272

3554 しげさのみ日ごとにまさる夏草のかりそめにだにとふ人のなき(み

つね)

3555 7-5 躬恒 86 「しげみのみ」「とふ人もなし」
かれはてんことをばしらで夏くさのふかくも人をたのみけるかな

3-12 躬恒 434、1-1 古今 686 「のちをばしらで」「深くも人の
もほゆるかな」、7-5 躬恒 319 「のちをばしらで」「ふかくも人の
おもほゆるかな」

3556 人しれぬわれよりほかに夏草のしげりあふこそみればねたけれ

〈未詳〉

3557 夏くさのうへにしげれるぬまみづの行方もなき我が心かな

7-6 忠岑 70、1-1 古今 462 「うへはしげれる」「ゆくかたのなき」、

3-13 忠岑 160 「なつくさにうへはしげれる」「ゆくかたのなき」

3558 つれづれとながめせしまに夏くさのあはれややどにしげりあひにけり
(ただみね)

2-3 新撰和 147 「夏草はあれたるやどにしげくおひにける」

3559 夏くさはむすぶばかりになりけりのがひしこまもあくがれにけん
(しげゆき)

3-35 重之 242 「のがひのこまや」、1-4 後拾遺 168 「のがひしこ

まやあくがれぬらん」

3560 なつくさのかりのよひとはわびしくも我に秋風吹き初めつるか

〈未詳〉

3561 ちちははにしらせぬこゆゑみやけぢのなつのくさをなづみくるかも

2-1 万葉 3310

秋

3562 いそのかみふるのくさも秋は猶色ことにこそあらたまりけれ(も
とかた)

1-2 後撰 368

3563 心なき身はくさ木にもあらなくに秋くる風にうたがはれぬる

1-2 後撰 1274 「うたがはるらむ」、1-2 後撰 286 「身はくさばにも」

「うたがはるらん」、3-15 伊勢集 295 「秋ふくかぜに」「うたがは
るらん」

3564 いづれをかわきてしのばん秋ののうつろはんとて色かはるくさ

(もとかた)

1-2 後撰 371

3565 秋の野のちくさにさけるはなの色のみだれて物をおもふころかな
1-1 古今 583 「秋ののみにだれてさける」「ちくさに物を」、1-

19 貫之 608 「秋ののみにだれてさける」「千種にものを」

3566 かみさぶとゆかさずはあらし秋くさのむすびしひもとくはかなし
も

2-1 万葉 1616 「いなにはあらず」

3567 おもふどちあるだに秋はわびしきをくさのかれがなるぞかなしき
〈未詳〉

3568 ふゆ

くさがれの野べをばうしとおもへばや冬ののくさと人のかるらん

(つらゆき)

3-19 貫之 20 「霜がれの草葉をうしと」「冬の野べは」、7-7

3569

貫之18 「霜がれのくさ葉をうしと」「ふゆののの辺を」
わがまたぬとしはきぬれど冬くさのかれにし人はおとづれもせず
(みつね)

1-1 古今 338、6-4 如意宝 16、7-5 躬恒 292 「としはふれども」

「おとづれもせぬ」

3570

やまざとは冬ぞわびしさまさりける人めもくさもかれぬとおもへば
1-1 古今 315 「冬ぞさびしさ」、2-6 和漢朗 564 「ふゆぞさびしさ」、

3-17 宗于 15 「冬ぞさびしさ」、5-22 陽成 16 「ふゆぞさびしさ」、

5-267 三十六 97 「ふゆぞさびしさ」

3571

わすられぬ心のうちは冬くさのかれにし人をこふるなりけり

〈未詳〉